

Title	中國民族學報, 第一期, 民國四十四年八月刊
Sub Title	
Author	伊藤, 清司(Ito, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.29, No.3 (1956. 12) ,p.127(355)- 130(358)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19561200-0127">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19561200-0127</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るのであるか、それとも史上の蝦夷を通じてであろうか。若し常識的に且つ直截に云うなれば、蝦夷の名で呼ばれるものはアイヌの祖に外ならないともされよう。この問題の解明には尙幾多の途が残されている。」と結ばれており、八幡氏はアイヌ論を主張されるかのように思われる。

以上に記した如く、蝦夷、アイヌ説、否アイヌ説、中間と五名の著明な研究者が各々異つた立場から異説を記しており、この問題が如何に深遠で難解なものであるかを如實に示している。

蝦夷が如何なる人種であり、如何なる生活をしていたかは到底今日に残された古記録の考證のみによつては解明し得ぬ問題であり、今後の形質人類學、考古學、民族學、言語學などの諸方面の研究を綜合して始めて解明せらるべき問題のように考える。

今日においてはようやくその研究が緒についたと云う感が深くまだこのように明確な結論が得られず異論百出するのはまた現在の研究段階では當然のようにも思われる。

なお私見を記すことが許されるならば、田名網氏や、鈴木博士の考説は、私の考へに最も近いものであり、正しい見解のようと思われる。なお筆者には若干異つた考説もありそれらについては稿を改めて記したいと思う。

以上諸先學の蝦夷 アイヌ、否アイヌ説を摘出し、本書の紹介に代える次第である。一讀をお奨めする。(江坂 輝彌)

## 中國民族學報 第一期 民國四十四年八月刊

中國民族學會(民國二十三年、南京にて設立)の機關誌「中國民族學報」がこの度、臺北に於て創刊された。凌純聲を主任とする編輯委員會の中には何聯奎・芮逸夫等の名が連ねられてゐる。本誌掲載するところの論稿は、悉くで十一篇。冒頭は何聯奎氏の

「四十年來之中國民族學」で飾られてゐる。本稿は所謂西學東漸後の中國に於ける民族學發展の足跡を具さに回顧、整理せられたものであるが、何氏はこの中で中國民族學の發展を四期に分つて説いてゐる。即ち、民國十五年頃までの萌芽期とも云うべき期間には、専ら歐米民族學の紹介に止まつた時代で、學的動きは余り認められぬが(以上第一期)十六年、蔡元培により中央研究院が設けられ、社會科學研究所が民族學的研究に従事するに至つてより約十年に亘る期間は、E. Smith や W. Schmidt 等西歐學者の渡華による刺戟もあつて漸く中國人自身の手による研究も興り邊境民族に對する科學的調査等も開始せられるに至つた。(以上第二期)ついで民國二十六年より三十七年に至る間は、略々對日抗戰期に當るが、その特殊事態にあつて多くの學者は四川等をはじめとして邊境に四散し、この期の研究は期せずして西南中國等の少數民族の社會に注がれた。(以上第三期)最後の段階は國共紛事に

よる國民政府渡臺後に當り、臺灣大學を中心として土着民社會の研究が盛んになる傍、中國本土より渡臺する學者との交流の活潑化して今日に至る時期である。(以上第四期) 以上の何氏の見解には政治的特殊事情によるものもあつて、必しも中國に於ける民族學的活動の一切が網羅評價せられてないのは止むを得ぬが、行間に中國民族學者の足跡が詳細に記述せられ、斯界の bibliography として極めて便利なものである。

偕て、何氏の論稿によつても示唆されるように、本誌掲載の論文は大別して、(一)第三期に行はれた西南少数民族の研究、(二)臺灣土着民の研究、そして、(三)兩者の比較を包含し、更には東南アジアに視界を擴げたものの三群に分つことが出来る。第一の群に屬するものには(以下頭首の數字は本誌掲載の順序を示す)

- (3) 芮逸夫の「親子合一的親屬稱謂」
- (4) 李霖燦・和才の「雲南麗江魯甸區麼些族的親屬稱謂」
- (5) 衛意林「臺灣土著諸族の部落組織形態」
- (6) 陳奇祿「臺灣屏東霧臺魯凱族的家族和婚姻」
- (7) 李亦園「臺灣平埔族的祖靈祭」
- (8) 唐美君「臺灣土著民族弓箭形制研究」
- (10) 林衡立「論阿里山曹族語法中之所謂準間接被動語態」
- (11) 顏一秀・林鴻德「蘭嶼雅美族性格之探討—用羅爾夏測驗法

第三の系列に入るものには

- (2) 凌純聲「東南亞的洗骨葬及其環太平洋分佈」
  - (9) 李卉「臺灣及東南亞的同胞配偶型洪水傳說」
- がある。以下その中の若干篇をとり上げ、簡単に内容を紹介すると、

(3) 芮逸夫「親子一的親屬稱謂」は、四川永寧河上流に住む苗族の親屬稱呼のうちにみられる世代を異にする親屬に通じて指稱される稱呼(例へば、父の弟と、妻が夫の弟を呼ぶ稱呼が同一)は、E. E. Tylor の所謂“*tekononymy*”(親從子稱)或は H. Loewe の“*Reverse of tekononymy*”(反親從子稱)の影響によるものであることを指摘すると共に、もともと同様な習俗と見做される中國の公・婆・舅・姑・伯・叔等の親屬稱呼との比較に及んだもの。尙、芮氏は“*Reverse of tekononymy*”に代へて新に“*tekisnonymy*”の用語を使用すべきことを提案してゐる。

(7) 李亦園「臺灣平埔族の祖先靈祭」  
臺灣土着民族の研究は既に邦人の報告も少くないが、李氏は先學の研究に立脚し、平埔族即ち熟蕃に行はれてゐる祖靈崇拜の儀禮を下記三つの型に分類してゐる。

- (i) 凱達加蘭(*Ketagalan*)、雷朗(*Luilang*)等、臺灣北部に多

い型態で、特殊な形伴はぬ祖先崇拜。

- (ii) 未婚男子 (mata) がその祭儀を司配すると共に、祭儀の一部として彼等によつて行はれる賽跑 (running race) を伴ふ賽跑型祖靈祭。道卡 (Taokas) 巴布拉 (Papora) 等、中央部に多い。

- (iii) 西拉雅 (Siraya) 等、南部に行はれるもので、祀壺型祖靈祭とも稱すべきもので、壺を祖靈の象徴とする風俗。

以上のうち、亦氏は賽跑型と祀壺型をとり上げ、前者は一種の Initiation Ceremony と關係あり、これと祖靈崇拜との混同したものであるとし、後者に就いては、ボルネオ・フィリピン等の原住民に行はれる同類の風俗と比較され、祖先の遺骨を納めた壺が祖靈そのものと考へられるやうになつたものであらうと説いてゐる。かうした分類の意圖する處必しも鮮明ではなく、今後の論稿を俟つ點もあらうが、臺灣平埔族間に行はれる祖靈祭を整理、分類された勞は認められよう。

- (8) 唐美君「臺灣土著民族弓箭形制研究」

臺灣土着民の使用せる弓箭の形態的研究により、それらにメラネシヤ型、ネグリート型、インドネシヤ型及び北アジア型の四つの型が見出されることを説き、更にこれによつて、臺灣に最も古く關係を有した文化がメラネシヤのそれであり、ネグリート・インドネシヤがこれに次ぎ、北方大陸文化が最も遅れて影響してゐる

ことを結論として述べられてゐる。

- (2) 凌純聲「東南亞的洗骨葬及其環太平洋分佈」

凌氏は先づ、東南アジアを中心として、太平洋の諸島及び西はアフリカ中部、東は南米アマゾン流域、北米大陸にひろがる洗骨の葬俗は、從來の如く、埋屍葬、葬具使用葬と並べて、分離した個々の葬俗として併列的に考へるべきものではなく、洗骨はもともと土葬、樹葬、平台葬等各種の葬屍を前提に伴ふもので、前提としてのこれら葬屍は本來腐屍收骨のためのものであることを説き次いでこれら洗骨を中核とする葬俗の發生地は揚子江中流・洞庭湖方面であつて、低地濕潤である當該地方の風土を生んだ葬儀であらうと云ふ結論に及んでゐる。凌氏のこの結論は「記本校二銅鼓兼銅鼓的起源及其分佈」(國立臺灣大學「文史哲學報」第一期所收)等と關聯を有するものであるが、些か大膽な假説であり、問題を今後に残すものがあらう。かうした傾向は凌氏同様第三の系に屬する。

- (9) 李卉氏の「臺灣及東南亞的同胞配偶型洪水傳説」

に於てもみられる。李氏のこの論稿はひろく東南アジアに分布する所謂同胞配偶型洪水傳説を蒐集し、これを諸種の見地より幾つかの型に分類した得難い勞作であるが、たゞこれら傳説の發生地を揚子江中流に求め、一つは臺灣を経、轉じてフィリピン・ボルネオ等東南アジアの諸島にひろがり、他の一はインドシナ半島か

ら遠くインド方面に分布するに至つたものとする點に關しては、尙、緻密な實證的研究に俟つものがあらう。一般に第三の系列に屬する論文は比較研究に急なる餘り、些か結論をいそぎすぎた憾みありとの批判もあらうが、然し、中國民族學會の人々の置かれた位置は、東南アジアを中心とする民族學にとつて、今後貴重な存在となるであらうことを信じる。その活潑な研究と成果に期待する所以である。年刊。四六倍版。二三一頁。尙、挿入寫眞が一般に不鮮明であるのは残念である。

伊藤 清司